

(3)被爆

丸山は、二度目の召集により滞在していた広島で被爆した。しかし、自身の被爆体験について公の場ではじめて語ったのは、原爆投下から20年が経過したのちである。復員後はじめて広島を訪れるのは、さらに10年以上後の1977年であっ



た(画像:宇品引揚援護局<1946年、Australian

War Memorial)。戦争中は陸軍船舶司令部として使われた。丸山はこの建物の前にいたため原爆の直撃を免れた。

のちに丸山は、戦後をかえりみて一番足りなかったのは原爆体験の思想化だったと述べている。関東大震災、戦時期の学問・思想への抑圧、軍隊生活についてはその体験を思想化することに努めてきたが、自分の思想を練りあげる材料として原爆体験を位置づけてこなかったという。その理由の一つとされたのが、戦争一般の残虐性の中に原爆の問題を解消してしまったことであった。

原爆の意味を深く考えるきっかけとなったのが、1954年の第五福竜丸事件である。このとき丸山は、原爆症が現在の問題であることに気づかされた。「広島は毎日起こりつつある現実で、毎日々々新しくわれわれに問題を突きつけている」(「二十四年目に語る被爆体験」1969年『丸山眞男話文集』第1巻)。